

■第1回コミュニティ再生ワーキンググループ議事概要

会 議 名	平成 26 年度新居浜市政策懇談会 第 1 回コミュニティ再生ワーキンググループ	
日 時	平成 26 年 8 月 26 日 (火) 13 時 30 分～15 時 50 分	
場 所	新居浜市消防庁舎 4 階 消防コミュニティ防災センター研修室	
参 加 者	委員 (19 名) <各種団体> 日野座長、柴田委員、沖委員、星加委員、佐々木委員、藤田委員、塩見委員、太田委員、片上委員、越智委員、斉藤委員 <市職員> 関市民部長、岡松次長、井上主幹、白石主幹、高橋副課長、加藤副課長、菊池主任、沖本主事 オブザーバー 高木講師 (聖カタリナ大学人間健康福祉学部) 説明者 本田課長 (ごみ減量課)	
事 務 局	市民活動推進課 (2 名)	
傍 聴 者	2 名	
議 事 内 容	1 協議の内容 (資料 1) 資料 1 の説明・確認 2 コミュニティの存在意義を確認するワークショップ (1) 「自治会未加入」を題材にしたワークショップ 自治会未加入の理由として挙げられた 10 個のキーワードについて、順位づけを行い、各班でまとめた第 3 位までを発表した。 (2) 「ごみ問題」を題材にしたワークショップ ごみ減量課長から別紙資料に基づき、「ごみ問題」の現状について説明を行った。その後、3 点について各班で議論を行い、議論した結果を発表した。	
質 疑 等	1 協議の内容	
		なし
	2 コミュニティの存在意義を確認するワークショップ	
	(1) 「自治会未加入」を題材にしたワークショップ	
		なし
	(2) 「ごみ問題」を題材にしたワークショップ	
		なし
	オブザーバー意見	
	高木講師	ごみの問題について、どのような政策を行うにしても、ライフスタイルを理解して考えてほしいと思います。ごみを捨てる人のライフスタイルも、「8時半から17時半のライフスタイル」「仕事が月曜日から金曜日のライフスタイル」「朝は仕事のため、ごみを捨てることが出来ない」「長期出張がいつもあつて帰ってくる事ができずに、帰ってきた日でないで捨てる事ができない」

		<p>など様々である。ライフスタイルを抜きに話を進めると、住みにくい土地になってしまう。ライフスタイルについて、自治会別で話し合うというステップは省かないでほしい。</p> <p>自治会未加入の理由には、「役員を担う」「仮住まい」「高齢化」という“変えられないもの”と、「存在意義が不明確」「加入が任意」「会費を払う」「人間関係のわずらわしさ」「自治会に対する不信感」「加入案内がない」という“変えられるもの”に分けることができます。さらに、“変えられるもの”は、「人間関係のわずらわしさ」「自治会に対する不信感」という“住民自ら変えられるもの”と、「存在意義が不明確」「加入が任意」「会費を払う」という“行政と協力しないと変えられないもの”に分けることができます。今回のワークショップで順位づけを行って、これから行動に移していく時に、“変えられないもの”をどう考えていくのか。例えば、「高齢化」をなんとかしなくてはいけないというのは、非常に大きな話になってくるので、まずは、「自分たちができることは何だろうか」と「行政と一緒にできることは何だろうか」と精査した上で、もう一度、自治会未加入の理由の順位づけを見ていただくと、もっと良いものになると思います。</p> <p>皆さんの話を聞いていると、未加入の理由にも「役員を担う」「高齢化」「人間関係のわずらわしさ」など関係する部分もあったと思います。関係する部分を見ながら考えていただければ、問題は少しずつ解決していくと思いますので、全体を見ながら考えていただければと思います。</p>
--	--	--

## コミュニティの存在意義を確認するワークショップ 発表内容

### (1) 「自治会未加入」を題材にしたワークショップ

<10個のキーワード>

存在意義が不明確、加入が任意、役員を担う、会費を払う、人間関係のわずらわしさ  
自治会に対する不信感、仮住まい、高齢化、太鼓台、加入案内がない

1班	<p>【第1位】存在意義が不明確、加入が任意</p> <p>【第2位】役員を担う、高齢化</p> <p>【第3位】人間関係のわずらわしさ</p>
2班	<p>【第1位】役員を担う、人間関係のわずらわしさ、高齢化</p> <p>【第2位】仮住まい、加入案内がない</p> <p>【第3位】存在意義が不明確、加入が任意</p>
3班	<p>【第1位】役員を担う</p> <p>高齢を理由に役員を担うことができないので、脱会する方が多い。</p> <p>【第2位】高齢化</p> <p>【第3位】存在意義が不明確</p> <p>昔は、葬儀の手伝いなど、近隣の助け合いが当たり前だった。最近は葬儀会社へ依頼をすれば大半が事足りるので、近隣で助け合うことが少なくなった。近所の方が亡くなっても、数日経ってから分かることがある。近隣のつながりがなくなっている。</p>

### (2) 「ごみ問題」を題材にしたワークショップ

- ① ステーション方式について（ステーション方式を継続するのが良いか否か。）
- ② ステーションの管理について（ステーション方式を維持する場合、管理運営をどのようにしたら良いか。）
- ③ 自治会未加入者との関係（どのようなルールがあると良いか。）

1班	<p>① 現状では、ステーション方式で運営するしかない。高齢者が、ステーションまでごみを捨てに行くというのは大変ではないだろうか。将来的に高齢化が進むと、行政が考えるべき課題となってくる。</p> <p>② 収集日ではない日にごみを捨てる人がいる。ごみ当番の人から、ごみの分別ができていないと苦情を聞くことがある。ノートに記録するのも良い方法である。</p> <p>本来、行政が戸別方式でごみを収集しないとイケないが、現状で戸別方式とするのは不可能であるため、自治会にお願いしてステーション方式を行っている。自治会は、行政からステーション管理の費用をもらっていないが、自分たちの地域環境を良くしようという任意のもとで、ステーションを管理し</p>
----	---

	<p>ている。</p> <p>③ 自治会未加入者については、ごみを捨てることのできる地域、ごみを捨てることのできない地域など様々である。未加入者もごみを捨てることのできることで、自治会加入率の向上も期待できる。自治会にごみの分別やノートへの記録などの役目を担ってもらうためには、管理運営の費用面について、行政として考えていただきたい。そして、自治会はステーションを管理していくことで、自治会加入率の向上につなげていきたい。</p>
2班	<p>① 処理費用を考えた場合、ステーション方式を充実して管理していくのが良い。</p> <p>② 自治会未加入者にもごみ当番を順番に回し、処理の大変さを分かってもらうことで、ごみの出し方も気にしてもらえるのではないかと。また、自治会加入率の向上にもつながっていくのではないかと。ごみ当番をすることによって、高齢者の安否確認にもつながっていくのではないかと。未加入者に費用負担を求めることは、ステーションにごみを捨てることのできるのが当たり前と思われるといけないので、慎重に検討する必要がある。</p> <p>③ 自治会未加入者には様々な問題も発生しているので、ステーションを使ってほしくないという本音はあるが、分別の徹底やルールを守った上で、ステーションを使ってもらってもいいのではないかと。行政も関与し、ごみ袋の有料化についても検討する必要がある。自治会にごみ袋の管理をお願いし、未加入者も自治会に買いに行くという方法にすれば、新たな加入につながるのではないかと。</p>
3班	<p>① 戸別方式は経費がかかるため、現在のステーション方式が望ましい。ステーションの管理運営に係る費用は、全て自治会が負担しているので、市で補助してほしい。また、ステーション方式を継続するためには、利用者全員が、カラス対策でネットをかけるなどのルールを守ることが必要である。</p> <p>② ごみの分別を間違っている場合、ごみ当番の人がノートに記録し、次の人に引継ぎをする。</p> <p>認知症の人や高齢の人など、ごみ出しに困っている人が増えてきている。近隣の人・見守り推進員・民生委員の人が手伝っている地域もある。お互いに助け合うという良い関係を構築しながら管理していく必要がある。</p> <p>③ 自治会未加入者もルールを守り、ごみ当番をしてもらう。未加入者も近くでごみを捨てる環境を作る。お互いに協力しながら良い関係を構築すれば、加入を勧めることもできるのではないかと。</p>